

「家がいいね」 第16号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2005.9.11

見えるものしか信じない「あなた」へ

青いお空のそこぶかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまでしずんでる、
昼のお星はめにみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

ちってすがれたたんぼほの、
かわらのすきに、だアまって、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根はめにみえぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

金子みすゞ「星とたんぼほ」より（昭和5年没）

生活とは、見えない部分の方が多いと思えますね。

劇場を作り出すもの

9月11日は、「見せられること」の多い日と思えました。投票の窓口調査の発表を20時になるのを待ちかね秒読みする複数TV局を見てあきれスイッチを切りました。

すべてを見せるものイベントにしてしまっ流
れがあります。昔読んだ『1984年』という小説の世界を思い出しました。双方向テレビ「テレビスクリーン」により監視されている世界。画面は常に指導者ビッグブラザーを称え、いかに今が理想的な社会かと宣伝し、一方で戦争のニュースばかり流される。次々と好奇心と熱狂と疲労で頭を埋め尽くすような異常な社会。何より使われる言葉が、短く単純・明瞭・不毛な記号に誘導される。禁止された日記でひそかに自我を保ち、権力に疑惑を持たれた人間は、全記憶が抹消される世界。

おそらく、この世界も、自分たちが選んだ結果だったと筋書きを思い出します。報道と権力は、表裏一体ではと、ちよっと背筋が冷たくなります。

「賢い患者学」というテーマ

9月1日（木）夜に、四日市市民大学講師として話してきました。「賢い患者学」の連続講座の中で、24時間対応の訪問診療としての分担です。「不安を受け止める事が大事」と話し、私達はつい「賢い頭と丈夫な体」を望みがちですが、それよりも「丈夫な頭と賢い体が必要」と言いました。精神科医のユングは、「人生の意味はその後半にある」と、40歳を過ぎてからはユックリと夕陽を見つつ下りの坂を降りて行く過程の大事なことを言っています。昼間はまぶしすぎて、直接に見ることが出来ない太陽（＝命＝死）も、落ち着いて眺める位置になります。「賢い頭」は全てをコントロールしようとする人工的欲の世界で、「丈夫な体」とは衰える体を「生」に繋ぎ止める、これも物質世界の望みに近いと、私は思います。逆説的ですが、徐々に衰える身体の症状を自然な警告と受け取る「賢い体」とどんな不利な条件も受けとめ「だいたいようぶ」と言える「丈夫な頭」が必要と思う訳です。

関連する本も紹介します。一度ご覧下さい。

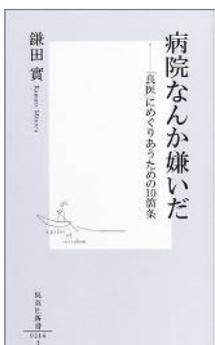
「元気が出る患者学」

柳田邦男

新潮新書



「病院なんか嫌いだ・良医にめぐりあうための10箇条」
鎌田實 集英社新書



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県度会郡御園村高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
HP <http://tcp-ip.or.jp/~takuro>